

「戦時中は基本的に食べ物が出なかったし、7人兄弟だったから、自分の食料は自給自足しなくちゃいけなかったんだよ。山に行つてはマキやクワ、グミやムクノの実を取って食べるのが、なによりの楽しみだった。マキの木の実が林檎の味がしたな。洪柿を家の軒先に吊るして甘くさせたりもしたけど、7人兄弟だからね、狙われてしまつし…自分でも待ちきれなくて食べてしまつたよ。そうそう、戦時中だから空襲警報が時々鳴つてアメリカの戦闘機がやってくるんだけど、僕は空襲警報が鳴るのが待ちどろしいやつだったなあ」



グミの実。

戦時中の話というと、当然苦しく悲しい話が多い。そんな中、曾根さんの話はむしろリアルに感じられた。戦時中と言つてもそれが日常なら、その中で楽しみや喜びを見つけ、生活していくのだから。たくましいなあ…。そして今よりも自然と共にある暮らしは、人間味に溢れていて、なんだか眩しく感じられた。

カリツ…カリツ…版木から目を離さないまま、曾根さんが昔の話をしてくれた。曾根さんが戦時中…15歳頃に体験した、静岡市内での暮らしの話だった。

「毎日のようにやってくるから慣れてしまつたのもあるけど、鳴ると学校が休みになるからね。休みになれば、山へ行ける。だから大人しい先生の時なんか、授業中に警報みたいな声を出して勘違いさせて、先生が間違いに気が付く頃はもう山へ行つた後…つてことをよくやつたよ。とにかく山へはよく行つたんだ。当時の燃料は薪や炭だから、母親に言われて、大きな籠を持って杉や松の枯れ枝を拾いにも行つたよ。薪に火を付けるのに、杉や松はよく燃えてちようどいいんだ。昔は山との距離が近かつたんだなあ…」



休むことなく手を動かしながら、静かに話をしてくれる曾根さん。

編集長 まめこの

『まめまめ放浪記』



今回の放浪記は、まめこのお気に入りのギャラリーをリポートします。温かい絵を作る、その心の中を覗きました…。



曾根さんから聞いた、マキの木の果のイメージ。実物を早く見たいなあ…

「版画は小さい頃から好きだったんだけどね。趣味でやっていた…」と、言葉少なに語ってくれた。曾根さんの作品からは、温かさが伝わってくる。何色も刷り重ねられた色合いは、時にノスタルジックであったり、現代的であったりもする。それはこの建物からも感じられる。日本人に馴染みの深い栗の木で造られていて、ダイナミックで力強く、表情が温かい。曾根さんのようだ。だから安心して居られるのかな…。

るぞ！」

いつものように、閉館間際にギャラリーを出た。秋の風を、胸一杯に吸い込む。「よし、今年の秋はマキやグミの実を食べるぞ！」

くにじ庵 (版画作家 曾根邦治の工房・ギャラリーです。)

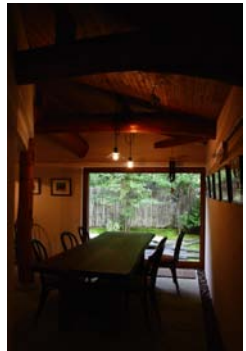
住所：静岡市駿河区丸子泉ヶ谷 3315-9
電話：054-257-1114 (FAX 共)
開館時間：10:30 ~ 17:00
定休日：水曜日 ※水曜日が祝日の場合は営業
行き方：国道1号線から駿府匠宿方面に入り約2分(吐月峰柴屋寺北)



ギャラリーには1995年に「春陽展」に初入選以来、その後の入選作品や小品など、常時40点ほどを展示しています。また、建物は土地の形状に沿って建てられています。登り下りする不思議な大谷石の床や、塗り壁のあたたかさ、ダイナミックな栗の柱や梁なども合わせてお楽しみ下さい。



左 / 土地の勾配や形状に合わせて、外壁がゆるやかにカーブしている。



右 / 余計な音などない、静かで落ち着いた空間。